

天正少年遣欧使節団と世界

1、伊東マンショの肖像画の発見とNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』から

- 16世紀末における肖像画の意味 1840年代に誕生した写真館の宣伝文句「ミニチュール（小さな肖像画）のような大きさの肖像写真を10フラン（=約1万円）で…」 肖像画は19世紀でも大変高価だった まして16世紀では、絵師も少ない → 欧州での遣欧使節の評価は非常に高い
- 黒田長政（官兵衛の長男）家康時代にキリストンを弾圧

2、遣欧使節は何故派遣されたか

- イエズス会巡察使「ヴァリニヤーノ」の日本布教方針
- 16世紀後半の西欧知識人の東アジア（中国と日本）認識
- マルコ・ポーロ『東方見聞録』の世界は本当だった。黄金の島ジバングは実在した。東洋の文化程度の高さを認め、礼節の国と評価
- 使節を利用して、ヴァチカンから資金支援を引き出し、宣教師養成学校を整備する。同時に印刷機を持ちかえり、布教用書物を自前で印刷する

3、使節団の構成

- 4少年 伊東マンショ、千々石（ちぢわ）ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノ、4人は有馬のセミナリオの生徒で、成績が良くかつ大友、大村、有馬のキリストン大名の遠縁で、かつ零落した武門の子
- 印刷技術習得要員 コンスタンチノ・ドーラード、アウグスティーノ
- ヴァリニヤーノ神父（団長）、ゴア以西はロドリゲス神父
- 少年の教育係 ジョルジュ・ロヨラ修道士、通訳 メスキータ神父
- その他大勢 船員を含めて総勢300人

4、旅路

- 長崎港出発 1582年2月20日 → マカオ着 3月9日
- しばし、マカオ滞在 マラッカ経由でゴア着 83年12月20日
船旅中、伝染病が発生し、30名が死去
- リスボン到着 84年8月10日 2年6ヶ月近い長旅
- リスボン、マドリード、ビサ、フィレンツェと各地で大歓迎を受け、85年3月23日ローマでローマ教皇グレゴリウス13世に謁見 その際枢機卿全員の出迎えを受ける。4月3日教皇死去
- 5月1日 後繼教皇シクストゥス5世の即位式典に列席、ラテラノ聖堂への行幸にも随行 → ラテラノ聖堂行幸図参照
- 6月3日 ローマ出発 ヴェネツィア、ヴェローナ、ミラノ、ジェノヴァ、バルセロナなどを訪問 86年4月13日リスボン出港
- 少年使節に関する印刷物、84, 85年の1年半で48点、16世紀末までの合計で90点を超える出版物が出されている。
- キリストン大名の名代を名乗り、かつ日本の王子との触れ込みも効果

5、使節は何故これだけの歓迎を受けたのか → 欧州側の事情

- 16世紀の欧州 日本の戦国時代さながらの戦争の世紀
100年間で戦争のなかったのは、10年足らず、それが17世紀も続く
17世紀の100年では、戦争のないのは、わずか4年のみ
- 霊権を握っていたのはスペイン、しかし、全歐に威令は届かない
1562~98年 フランスの宗教戦争、1568年~オランダ独立戦争
オスマン帝国の進出に対する戦争
- そこに、宗教改革の嵐に見舞われている → 緒戦は、新技術である印刷術を巧みに利用したプロテスタントに完敗 ルター派の圧勝
カトリック教会の再建は1540年代から → 対抗宗教改革と呼ぶ、
その中心となったのがイエズス会 (ロヨラ、ザビエルら6人で出発
仲間を増やし、世界各地に伝道の足を延ばす。インドのゴアを拠点に
インド以東の世界での布教活動に取り組む。欧州での劣勢を世界規模で
取り返す
- 欧州からみて、地球の果てに見える黄金の島から少年使節がやってきた
というの、稀にみる絶好の宣伝ポイント → 最大限に活用した
- そして、書物やパンフレットの活用の効用は、素直に認める

6、使節団の帰国と国内情勢の変化

- 出発直後の82年6月 本能寺の変 (キリストンの保護者、信長死去)
豊臣秀吉の天下統一
- 87年5月29日 ゴア到着 (1年1ヶ月半)、ヴァリニャーノと再会
6月4日、コレジオにて、原マルティノ、ラテン語で感謝演説
翌年、ドラード、アグスチーノの手で現地で出版
7月24日、九州討伐中の秀吉、博多で伴天連追放令を発す
- 情勢の変化で帰国を延ばし、マカオに滞在する
- 90年7月21日 水面下の交渉の結果、8年半ぶりで無事帰国
ヴァリニャーノはインド副王使節の名目で、使節団は、各地で頂戴した
贈り物の数々を秀吉に献上すると言上して、帰国の許可を得た
教育係だったロヨラ修道士は、ゴアで病死
- 印刷機は、まずゴアで『原マルティノの演説』を発行 (88年)、
マカオで『キリスト教子弟の教育』(88年)、『遣欧使節対話集』(90年)
を発行 帰国後は加津佐のコレジオに設置。その後3台に増える
- 91年3月3日 聚楽第にて秀吉の謁見を受ける 持ち帰った楽器で
西洋音楽を演奏、秀吉4人に仕官を勧めるが、師に仕えると辞退

7、セミナリオとコレジオ・ノビシャド

- カトリックの教育機関 セミナリオは中等教育、コレジオは高等教育
ノビシャドは修道会員の養成機関、修練院とも訳す
- セミナリオの授業科目 ラテン語 (日本人) と日本語 (外国人)、夫々
の古典、音楽、体育、数学、演劇など
- 秀吉の伴天連追放令以後、九州以外の学院はすべて閉鎖

- 1614年の家康の禁教令で、九州のセミナリオもすべて閉鎖

8、キリスト教版の出版

- 日本で最初の活版印刷 → すべて宗教書と信者用の読み物
- 漢字の製作が難しいため、ローマ字や片仮名や平仮名中心
後半には、漢字利用の日本語のものもある。
- 国内で最もまとまって存在するのは、天理大学図書館の32点
ローマ字表記の書物があるので、当時の発音が解明できるため、言語学者の利用が進んでいる

9、使節団員のその後

- 1601年 千々石ミケル棄教 千々石清左衛門を名乗る。しかし、大村藩とキリスト教の双方にうとまれ、苦しい生活を送ったらしい。晩年の様子は不明。何故棄教したかも不明。
伊東、中浦、原の3人は、神学を学ぶためにマカオのコレジオに留学
- 1608年 3名は捕って、司祭に任じられ、長崎と周辺で活動
- 1612年 伊東マンショ病死（40代前半）
- 1614年 幕府最初の禁教令 宣教師は追放、教会堂はすべて焼失
原マルティノ、マカオへ脱出 中浦ジュリアンは国内に潜伏し、九州各地で、隠れ信者たちを助けて、布教活動を続けた。
- 1629年 マカオで原マルティノ病死
- 1633年 中浦ジュリアン（32年末に捕縛）、33年10月18日、逆吊るしの刑に処され、3日後に絶命。壮烈な最後を遂げた。
長崎の日本二十六聖人記念堂に、潜伏中にジュリアンがローマに送った手紙が展示されている。そこには、「私のいる口之津では、もう20人の殉教者が出来ました。私の慰めはかつて聖なる都ローマで受けた愛に満ちた恵みだけです」と記されている。
- 1637年 島原の乱

10、時移りて

- 島原の乱以後、日本のキリスト教は、孤立した隠れキリスト教が、わずかに残るのみとなりました。その中で少年遣欧使節の記録はすべて処分され、記憶からも消え去ります。それは、明治に入り、キリスト教禁制が解かれた後も同じでした。
- しかし、少年遣欧使節の記録と記憶は、彼らが訪問した欧州のカトリック世界やイエズス会士の間で、読み継がれ、語り継がれ、やがて日本にやってきた宣教師や学者・技術者などによって、さらには欧州に留学した日本人によって、明治の後半に、改めて日本に紹介されました。
- この少年使節のことが、中学校や高等学校の歴史教科書に載るようになったのは、昭和30年代に入ってからのことでした。

[資料]

★ 16世紀末、オランダの知識人が著したアジア旅行記

リ恩スホーテン『東方案内記』(1596年刊)一部抜粋

中国について

「シナ王国の河川や港湾には、船や内航船などの船が溢れるほどにいっぱいである。一つの脅威といってよいほどである。国土は澄んだ空気と温暖な気候に恵まれて極めて肥沃、あらゆる物産が溢れんばかりに豊富で、トウモロコシや米などの穀類は1年中種子が蒔かれ収穫されている。…この国では絹を身にまとうのが、ごく普通の習慣であって、オランダで粗末な毛織物を着るような感覚である。…そこで製作される陶磁器類は、話しても信じてもらえないくらい大量で、しかも最も優美なものは、水晶のグラスでさえ比肩出来ないくらいに優美である。…その上この国では、砂糖や蜂蜜や蝋も豊富で、また各種の薬草や根、本草の値段がそこぶる安い。さらに驚くことに、この国にはオランダの果実はどれもみな置かれている上に、われわれの知らない果実もいろいろ置かれていて、中にその甘さにおいて、砂糖をしのぐオレンジまである。ここには人が考えつくもの、渴望するものがすべてそろっているのだ。」

日本について

「ヤパン人が非常に俊敏で、物事を速やかに学びとることは、ポルトガル人がヤパンに行き着いて以来、経験によって明らかにされてきた通りである。この国の普通の平民は、地方の人たちを含めて、あたかも宮廷ででも養育されたかのように、礼儀作法がそこぶる優美なのだ。その上、必要とあれば、武器遣いの名手に転じることもできる。けれども彼らの間に刃傷沙汰は、ほとんど見られない。…ヤパン人の举止、作法、言葉づかい、実生活上のすべての儀礼や挨拶は、あらゆる他国民のそれとまったく反対である。…食事についてのしきたりは、めいめいが自分だけの小卓につき、食卓かけやナップキンは用いず、シナ人と同じく2本の小さな木を上手に使って食べ、米で醸造した酒を飲むのであるが、この酒を飲んで彼らはよく酩酊する。これが彼らの唯一の弱点である。」

→ 欧州よりはるかに進んだ文明が、中国と日本にあることが認識されている。

★ 16世紀後半の欧州事情

当時の欧州の霸権国家はスペイン ただし、力は絶対ではない

スペイン王 カルロス1世(在位 1516~56 1519より神聖ローマ皇帝カール5世)

その息子がフェリペ2世(1556~96) → 1580 ポルトガル併合

→ 少年使節訪欧時の最高権力者

しかし、オーストリアを助けて、オスマン帝国と熾烈な戦いを継続中 そして
ネーデルラント独立戦争(1568~1648)にも手を焼く

→ ネーデルラントの北部7州が、1581年にオランダ独立宣言を発す

フランス → 1562~1598 ユグノー戦争の最中

母后のカトリーヌ・ド・メディシス(1547~89)の時代

オーストリアハプスブルク家 ルドルフ2世(1576~1612)

イギリス → エリザベス1世 (1558~1603)

ネーデルランド独立戦争に一時期巻き込まれる

1588 アルマダの海戦 スペイン無敵艦隊の敗北

ドイツ → ドイツという国家的まとまりは、この時期にはまだない。

北イタリアを含めて、神聖ローマ帝国という名称のみの実態のない

枠組みの中で、各地の領邦の群雄割拠が続いていた。この状況は

17世紀に入ると、さらにひどい状態に陥って行きます。

イタリア → ここも小国家分立状態が続いていた。

北ヨーロッパ → デンマークに代わり、スウェーデンが北の大國として台頭
ロシア国家の誕生は17世紀に入ってから、その大国化は18世紀と共に始まる。

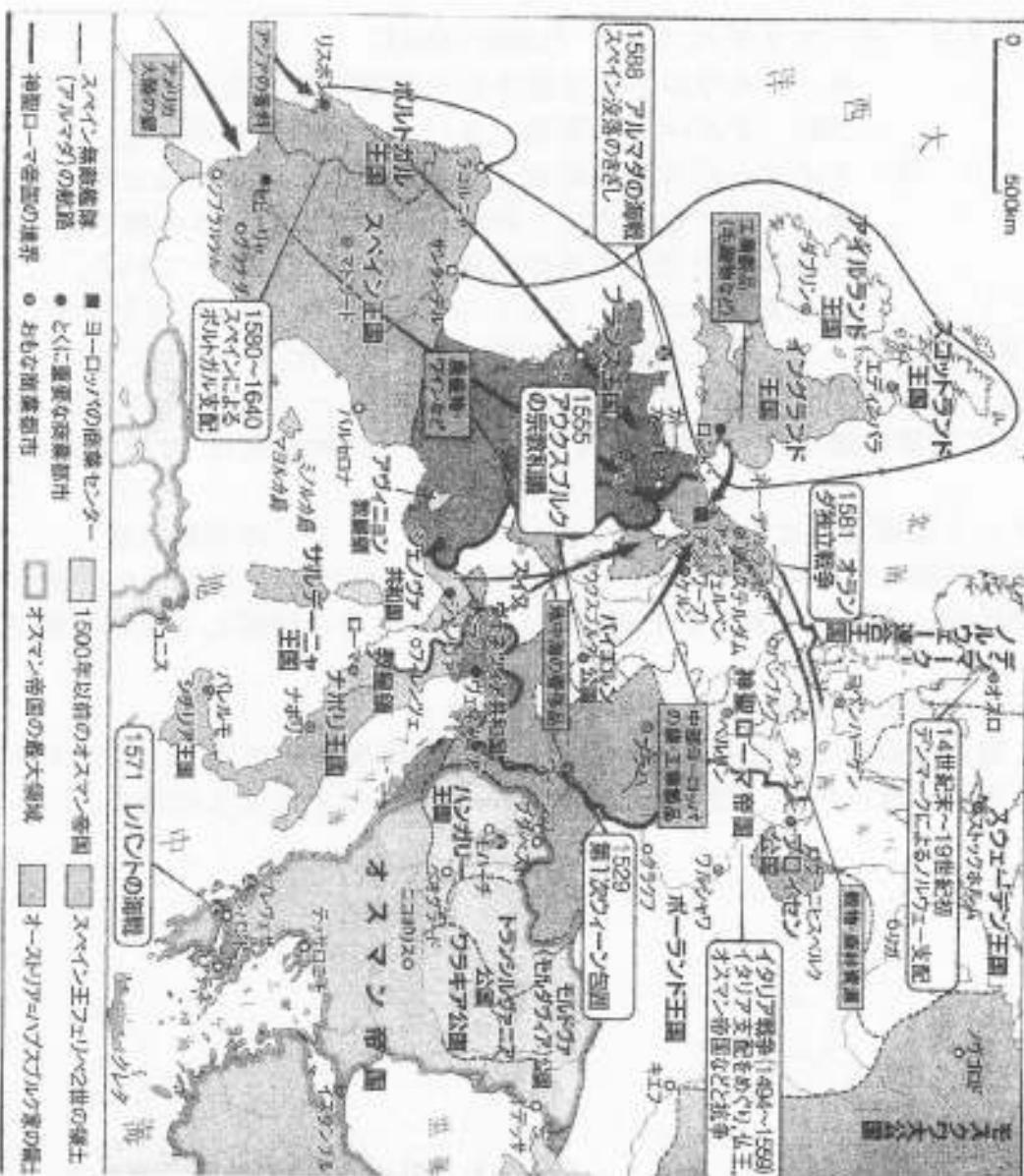
こういう混沌とした状況の中で、マルティン・ルターの登場以後

宗教改革派（プロテスタント）におされに押されていたカトリック教会は、16世紀後半以降、今までのあり方を猛反省し、自己改革を徹底して反撃に転じた。

→ その反撃の先兵となったのがイエズス会

→ 長途を厭わず。世界各地に進出 同時に印刷本の効用をプロテスタントの成功から謙虚に学び、信者向けの読本を多数制作するようになる。





16世紀後半の社會

アントニオの年齢	16歳
アントニオの年齢	16歳
アントニオの年齢	16歳